

西郷岬灯台

大山隠岐国立公園
日本海 隠岐群島



大山隠岐国立公園 (だいせんおきこくりつこうえん)

大山隠岐国立公園は鳥取・島根・岡山の3県にまたがり、1963年(昭和38年)4月、国立公園に指定されました。大山から蒜山、三瓶山一帯の山岳地帯、島根半島の海岸線、隠岐諸島など4つの地域の変化に富んだ豊かな自然と景観が見どころです。

境海上保安部

隠岐群島の 主な灯台



- ① 西郷岬灯台
- ② 四敷島灯台
- ③ 那久埼灯台
- ④ 隠岐福浦埼灯台
- ⑤ 池尻埼灯台
- ⑥ 黒島埼灯台
- ⑦ 崎山岬灯台
- ⑧ 白島埼灯台
- ⑨ 隠岐沖ノ島灯台
- ⑩ 西郷港姫島灯標



西郷港姫島灯標



- ① 小森島灯台
- ② 野田埼灯台
- ③ 知々井岬灯台
- ④ 隠岐松ヶ埼灯台
- ⑤ 高田鼻灯台
- ⑥ 木路ヶ埼灯台
- ⑦ 三度埼灯台
- ⑧ 赤灘鼻灯台
- ⑨ 知夫里島灯台



知夫里島灯台



境海上保安部

鳥取県境港市昭和町9-1

TEL./FAX. 0859-42-2532

<http://www.kaiho.mlit.go.jp/08kanku/sakai/>

境海上保安部
ホームページ





西郷岬灯台の真下に見える"爆裂火口"

西郷岬灯台と隠岐空港のある岬一帯の半島は、約55万年前の噴火によってできた溶岩台地です。噴火で流れ出た粘性の低いサラサラな溶岩が平らな台地を形成しました。隠岐空港は、この平らな地形を利用して設けられました。

灯台足もとの急な崖の下は、この半島ができた際の噴火口のひとつです。マグマ水蒸気爆発で形成された「爆裂火口」の東側半分が吹き飛ばされ、西側半分の火口壁がお碗の断面の様な形で今も残されています。灯台の白い姿とその崖下の火口壁は、隠岐航路のフェリーからも見ることができます。

4つの有人島と多くの無人島で構成される隠岐群島とその周辺の海域エリアは、島が存在する歴史と日本形成が垣間見える大地と謎の多い生態系が存在する貴重な島として、平成25年(2013年)9月、世界ジオパークに認定されました。

参考：隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会ホームページ、山陰・島根ジオサイト地質百選(ウェブ版島根地質百選)より



西郷岬灯台

SAIGO MISAKI
LIGHTHOUSE

きた まえ ぶね

北前船「西廻り航路」

日本海交流の拠点、西郷港

西郷岬灯台は、隠岐四島の中で最も大きい島「島後(どうご)」の西郷湾入口の岬に建っています。灯台と隠岐空港のある地域を地元では「岬町」と呼び、西郷岬灯台は「岬灯台」の名でも親しまれています。

西郷港は、昔より天然の良港として知られ、江戸時代半ばより明治30年頃まで北前船の「西廻り航路」の重要な寄港地として栄えました。北前船の水や食料の補給港、帆船の「風待ち港」として、往時には年間二千隻もの入港があったと記録されています。

西郷港は、今も隠岐の経済、観光の中心となる玄関口になっています。

大正10年 初点。百年照らす 日本海の離島灯台

灯台の建設資材は、岬の西側にある今津港から荷揚げされ、陸路約4キロを運ばれました。当時は、西郷から灯台までの陸路がありませんでした。

西郷岬灯台は、大正10年(1921年)3月31日に初点灯。レンズは、国産第一号の第四等フレネルレンズが導入され、今も現役で使用されています。

灯塔は、中世ヨーロッパのお城を思わせるような全国でも珍しい形状をしています。また、平成の改修と補強工事で設けられた1階外壁のバットレス(控壁)がモダンな雰囲気漂わせています。大正時代に建設された沿岸灯台は全国に39基ありますが、建設当初の姿がそのまま残されている唯一無二の貴重な灯台です。

西郷岬灯台の歴史

- 1920 大正9年 5月5日 灯台起工
- 1921 大正10年 3月31日 灯台初点
国産第一号の第四等フレネルレンズ
石油蒸発白熱灯
- 1948 昭和23年 5月1日 海上保安庁発足
- 1954 昭和29年 光源の電化・白熱電球を導入
- 1964 昭和39年 灯台無人化
灯台宿舎を撤去
- 2003 平成15年 耐震補強工事
- 2020 令和2年 第27回「しまね景観賞」
公共建築物の奨励賞を受賞
- 2021 令和3年 初点灯から100周年



西郷岬灯台のすがた



海側よりの灯台全景



2階から灯室へのらせん階段



分銅室



上:1階ホールと分銅室
下左:分銅室内 下右:分銅

分銅の役割

レンズを回転させる装置の動力源が「分銅」です。鳩時計に似た仕様で、吊り下げた分銅の落下エネルギーを利用して、レンズを回転させます。



建設当時からの記念額



正面



側面

灯室

2F
階段室

ホール

入口

控壁

灯ろう



灯ろうと四等フレネル式レンズ



建設当時の回転機械
(灯室)

↑ 灯台頂部
11,280

灯火中心
9,100

灯室FL.
6,930

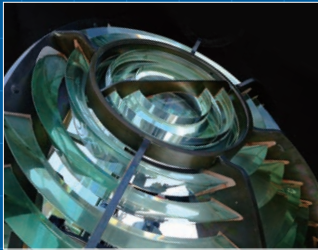
2階階段室FL.
3,889

GL. 0,000 mm

西郷岬灯台 [航路標識 No.893]

初 点	大正10年3月31日(1921)
所 在 地	島根県隠岐郡隠岐の島町 N 36-10-17 E133-20-23
構 造	白色塔形コンクリート造
灯 質	群閃白光 毎30秒に2閃光
光 度	28万カンデラ(実効光度)
光達距離	22海里(約41km)
明 弧	173°~82°
レ ン ズ	四等フレネルレンズ(国産) (日本光機工業(株))
高 さ	地上~灯台頂部 11.28m 水面~灯火 109.00m

大正時代に作られた 国産初の第四等フレネルレンズ



明治時代に建設された出雲日御碕灯台などで使われる大型レンズは、イギリスやフランスで作られていました。その当時の日本では製作する技術が無かったからです。

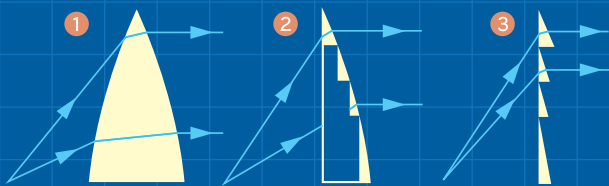
大正時代に入り、灯台建設が盛んになると、大型レンズの購入費用も膨らみ、大きな負担になっていました。そして、第一次世界大戦の影響で大きなレンズの輸入が困難となり、灯台用レンズの国産化に踏み出しました。

大正8年(1919年)、元燈台局の技術者を中心に日本光機工業(株)が創設され、大正10年(1921年)、国産初の第四等フレネル式レンズの製作に成功、その第一号が西郷岬灯台に採用されることとなりました。

西郷岬灯台は、フレネル式レンズと反射板を併用。レンズが30秒で一回転する間に2回の閃光をする仕組みとなっています。

フレネル式レンズは、レンズ本来の厚く重いという欠点を解決するために1822年にフランスのオーギュスタン・フレネルによって考案さ

フレネル式レンズの構造



所蔵 / (一社) 隠岐の島町観光協会

れました。フレネル式レンズは焦点距離により、レンズの大きさで一等から六等の等級で分類されます。

第四等レンズの規格・寸法

焦点距離 : 250 mm、レンズ高さ : 722 mm

41キロ先まで届く 安心の光

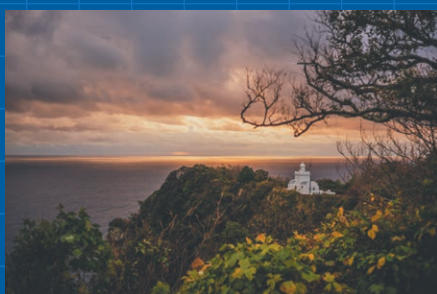


建設当時は、石油の燃焼で発生する白光を光源にした「乙式石油蒸発白熱灯」を使っていました。夜間も職員が光を見守り、日中はレンズに付いた「ス

ス」を拭き取るレンズ磨きが欠かせません。

昭和29年(1954年)、光源は電化によって白熱電球に替わり、現在の施設は、高輝度・高効率で寿命の長い「メタルハライドランプ」が導入されています。消費電力70W、約41キロ先まで届く強い光を放っています。

西郷岬灯台点灯「100周年記念フォトコンテスト」入賞作品



境海上保安部長賞



隠岐の島町観光協会会長賞



隠岐海上保安署長賞